

教育相談課だより No.19

学力を経済学から捉える②

教育相談課だより No.18 では、「学力の経済学」（中室牧子著 ディスカヴァー・トゥエンティワン）に紹介されているハーバード大学での研究に触れました。この書籍では、他にもたくさんの検証を示しています。

例えば、コロンビア大学のほめ方の研究です。テストの結果がよかったときに、「あなたは頭がいいのね。」と称賛するグループと、「あなたはよく頑張ったのね。」と称賛するグループでは、その後のテストの成績に差が生じるのだそうです。「あなたは頭がいいのね。」と称賛されたグループが成績を落としたのに対し、「あなたはよく頑張ったのね。」と称賛されたグループは、成績を伸ばしたということでした。この検証にも様々な考察がされていますが、結論としては、「今日は1時間も勉強できたんだね。」や「今月は遅刻や欠席が一度もなかったね。」等と、具体的に子供が達成した内容を挙げる事が重要だとしています。

実は、茨城県教育研修センター教育相談課で実施した研究でも似たような結果が得られています。平成26・27年度に実施した「心理教育的アプローチを生かした学級づくりと授業づくりの一体化」の研究では、アドラー心理学をベースに研究を進め、結果として育成された共同体感覚と学習意欲との関連性を検証しました。アドラー心理学とは、「勇気づけ」の心理学とも呼ばれており、技法としての「勇気づけ」を重視しています。「勇気づけ」とは、その児童生徒なりのささいな努力や成長に目を向ける態度や行動のことです。この「勇気づけ」により、学級や集団への所属感や信頼感、貢献感などを総称した共同体感覚の育成を試みました。我々の研究で分かったことは、各校種（小学校、中学校、高等学校）ともに共同体感覚と学習意欲には相関関係があり、共同体感覚の高い児童生徒は、学習意欲も高い傾向にあることでした。実は、「学力の経済学」で紹介された「今日は1時間も勉強できたんだね。」や「今月は遅刻や欠席が一度もなかったね。」という対応は、アドラー心理学でいう「勇気づけ」の対応と合致します。これらのことを勘案すると、本人の能力やテスト結果に焦点を当てるよりも、本人が達成した具体的な内容や努力を称賛する方が効果的だと考えられます。



「学力の経済学」は、「思い込みで語られてきた教育に、科学的根拠が決着を付ける！」と銘を打ち、様々な検証を紹介している書籍です。「学力＝教育学」ではなく、ときには経済学や心理学に目を向けることで、新たな発見があるかもしれません。